

横瀬古墳とヤマト王権のつながり（後編）

4. 古墳時代中期の九州の首長

3世紀後半から5世紀にかけて日向と大隅地域で広域的連合首長墓と言える大型前方後円墳が築造されませんが、ヤマト王権と深くつながっていたのは日向と大隅地域に限定していたわけではありません。むしろヤマト王権にとっては朝鮮半島に近い東シナ海沿岸部の勢力との連携は重要であつたはずで

実際に、古墳時代中期後半には西都原古墳群で女狭穂塚、男狭穂塚、そして横瀬古墳が築造される時期に、有明沿岸地域でも100mを越える前方後円墳が造られます。重藤輝行氏はヤマト王権から威信財として各地の首長に配布されたとされる短甲と、朝鮮半島系の威信財のひとつ金製、金銅製の垂飾付耳飾の中期におけるそれぞれの分布を比較し、「朝鮮半島との対外交渉に關与することで権威を高め、畿内政権からも認められた首長層に重点的に短甲などの威信財が配布され、その死に際して大型古墳を築造した可能性を考えた」としています（重藤2015 25頁）。

九州においては古墳時代中期初頭から横穴式石室が導入されます。横穴式石室は、肥後・筑後南部から肥前・北部九州で主に築造されますが、一般に横穴式石室は朝鮮半島などから伝わったものと言われています。このように、ヤマト王権との政治的ネットワークを持ちつつも、朝鮮半島との交流関係も深め、九州地域の首長層の独自の活動も展開していた可能性ががあります。

ただし、注意したいのは古墳時代中期以降、有明海沿岸から玄界灘沿岸地域の古墳文化と日向・大隅地域の古墳文化には違いがあるということです。大きくは前者は横穴式石室を導入していますが、後者は高塚墳では前期に引き続き縦穴式石室を採用しており、横穴系の墓制として地下式横穴墓が日向・大隅地域の限られた地域に分布する点も異なります。先述したとおり、ヤマト王権にとって朝鮮半島との対外交渉が重要であるとすれば、日向・大隅地域より有明海沿岸から玄界灘沿岸地域の首長にこそ、九州最大級の前方後円墳の築造がふさわしいように思えます。

5. 横瀬古墳とヤマト王権とのつながり

横瀬古墳の被葬者はこの東アジアの動乱とヤマト王権を中心とした倭国の変革期に出現しました。そして中期後半の九州を代表する広域的首長連合のトップとして君臨しました。日向・大隅地域内で広域的首長連合の盟主の座は移動しますが、4世紀から5世紀にかけて九州最大級の前方後円墳が一貫して日向・大隅地域に築造されるには、それなりの理由があつたはずで

横瀬古墳は『海浜型前方後円墳』に位置づけられます。古墳時代、特に前期から中期にかけて海浜型前方後円墳は九州では有明海・玄界灘沿岸、東九州沿岸、志布志湾沿岸、山陰から北陸の日本海沿岸、瀬戸内海から大阪湾沿岸、中部から関東の太平洋沿岸に造られます。広瀬和雄氏は海浜型前方後円墳の特徴として、①海岸に向かつて張り出した台地や丘陵、海岸線に沿って発達した砂丘など、海岸線や入江、潟湖を見下ろす小高い所に立地する。②水田稲作に適した沖積平野はほとんど見られず、砂丘の後背地に湿地はあつても

農耕に向かない場所にある。③前方後円墳にかかわらず大型のものが目立つ。の3点を挙げています。農耕面で生産性のない領域の中で、大型古墳を造営していることを指摘しています。

4世紀末から5世紀代、畿内では大阪湾をめぐるように海浜型前方後円墳が造営され、九州では宗像地域と関東では東京湾岸及び香取海周辺（むなかた）に海浜型前方後円墳の拠点が造られます。福岡県宗像市にある沖ノ島で航海の安全を祈願した祭祀が行われ始めるのは4世紀後半です。朝鮮半島との交易拠点として、ヤマト王権は宗像地域を重視しました。広瀬氏によれば、ヤマト王権は朝鮮半島から鉄素材と渡来人の新しい技術を手する等価交換として、高句麗の南下政策に対する『派兵』を行っていたと想定しています。これに關連して、東国首長層、そして九州、西日本各地は朝鮮半島における兵力を確保し、宗像に集結させていたという想定をしています。

ヤマト王権は地方の首長層と政治的ネットワークを構築するために重視したのは海上交通を掌握していた